



進代
老則

靈魂得脱物語

へ
1882
2



腹中を穿るもさるく毒汁を飲まざるの強はつ
わい命断りしりし七之末熟意なる紅丸に
かけく美半銭を拵申送つし後熟よんを拵
てお煎の法をすまても言ませりしを御ちり
八日月よし七月の夜に御飯拵けりし六
之毒者の毒を拵して服拵ぬき拵申くは七
銭のしんぐ云りハ方銭の實者も是りゆへ
心成ゆへしりよし日か地へ納りし記しわ書
ゆふ美をいせし一年来の拵りれども存生の
肉ハおしあしざり記記しハ業通のちゆへハ

一々知りぬかふ死をよへし恨みぬいせし
るて切りりりゆへは七肝魂もせぬきどぬき
合き切じゆひり下人が眼を六之末ハ見え
路もすへぬゆへ人が乱舞志ぬしゆねぬいけ
せぬぬきかきとせぬりるぬねた志しし騙へし
よりゆゆゆゆゆ付初さく六之末拵りゆへ
は七之末をすしし体み拵るよ又六之末拵る
切りゆゆゆゆゆ拵合せぬきハ又六之末拵る
ち成んししし志どくゆゆゆゆゆハ又六之末
拵る切りゆゆゆゆゆ半六之末拵るゆゆゆ

ぞと銀人の月よさき思ハ入へどりきぬほせハ
 くよはれぬく九口めよわぐも死に死にりお便と
 とたそ終しそいづべにやうハなつり死ぬ六多傷
 その日あつたあへ死に出く後敵城川休くハ
 刀やうなるゆくと歩あやうい敵も志きまはし
 後敵目よハ入へく痛むのなつん方りわめさ
 さうんで逃んやまされハあつく川あせくり急もさ
 せせげりり下女あされそ何とふれまよや
 いられ二口ころのあやま言ら後もあつく入るそ
 けいりりあやうい一対六多思どのあつてか

やうくとゆらとゆらめさりり下女なげり
 わららるる入息よあつしあれ月よ六多傷也
 入へどゆしそいづべにやうハなつり死ぬ六多傷
 成なるさあめとあはれにゆきあはれげりり
 夢へる意地の責よ傷ら死ゆぬ合れらるるも
 ながれハゆくと傷まきそくみ六日あつし一見と
 見出しうめ死にやあつし一りり

されハ今年廿年余ふあつりり国あもあつ
 もあつりあつりあつりあつりあつりあつり
 もあつりあつりあつりあつりあつりあつり

やまき血の候をまじりて後城にとも甲斐
 有まじり今までふ城せ一人をさるる事
 ちを北にり一かやうれ半紙にすて後にか
 びらうど大津より一むべし今までせ
 ふ城の形をほろりりやおまをならへきやの
 吾根をさる一相御の祿名ころりこれおまじり
 方城野會念はくはてて佛の御慈悲
 成打をさるる滅罪のほろり事成りんぐ
 き事なりり

嫉妬を欲れ心ふりてお指地とぬく影よ
 角生ころ半

元文二年に以總念より一歳斗に後家十又
 年けるる如娘を人からお角あまはまこと
 けいひをさるる事せり一若らりてそのあまは乃内は
 目わら若のる紙十歳の紙よりまわしひくくして
 たるあつてけ志成きやうりて修ひく受月かより
 しくわんを覚え若るれば後おをたふ不便が
 初年より園らりて病所をせりゆへ廿二歳より
 くれまじりておまをさるる侍より百はくひりりいしはこれ

下



上

少ののきれそてりりよ指の先もつねと遠いりや
うよ急へゆへに結く足指は十は指の先志
くうみる地のからよぬわりの方なすうんせ
氣うひるをもとへしづれども各角Pされい
よれまかくまへまきうあうひまきえ結くうか
ぶらなる指をぬぎられは終よ八角ううんえに
ハ耳れまきいやで切くひまきゆき事道ぬ
のゆよゆり十の指えハまきうん地ゆぬて
或ひろくゆわしうりまゆれまけり指をえ
くれりりしころりしと各角りふべ地やうもな

夕のゆまつよ指がわうてまゆをみ指を切
おれゆいしゆ指は結し出家の好むゆりり母
もけ作をえんそまう判髪深衣しその後ハ
指毫を考やし三人一あり各指念仏たて
たうざんられバ一二月の内了母が角をとり
くたうとり十は指先を左のぶとくまわり
られバ三人もまは悦びいのみ日祝念仏たて
ざりられお記のお後ひきられも色指ゆふ
ハ子も指たりの事ども威威し月あなけり紙
あし事近き指紀よえへり



小八貝の交際へせしめし徳に由くと
 徳をわんごらるゝ新みぢぢらべし人
 徳がたく佛おあひごゝゝわらゝべく
 後世の資料成たさるゝ事なりけり

道宣律師之浄心戒勸云女人之十惡

一 貪 妬 無 厭
 女人の妬をわたりふ事海り
 一切の大河小川の流をわたりふ事
 海り
 一切の大河小川の流をわたりふ事
 海り
 一切の大河小川の流をわたりふ事
 海り

るるびよわき放人でも何事ぞれども交
合ふる紀とれりよ多敷所時も腫欲成り
すりし事なり

二 嫉心如火 女何事かバ思ひこは

あわ親切ぶるよいつぞと心の中あわ何
かここの物もあふあつりつまこあつて
女人の身ハ生ハ思坦一毒をも何と
れわい地を物とて教してぬもこつて
人ぞせらせしちわわあつらよ

三 非親含笑 人よ何事かハ思ひこは

起よまのつひをあつみ多岐あつらよ
あつらよあつらよ地の男をわめてハ
指りせん事成れりハ生ハ思坦一毒をも
何とれわい地を物とて教してぬもこつて

四 放逸無慚 うはくしきおをほし

かんごうくけいやうれがの能をぬひ
おをぬるよあつらよ地の男をわめてハ
指りせん事成れりハ生ハ思坦一毒をも
何とれわい地を物とて教してぬもこつて
人よ何事かハ思ひこは

五口多悪業

五口多悪業 破事よけく高公行かきぬ
へよ実の心短知きかろく一素向をんる
そくあーく新そくハ素ふ約の事成
母姉妹たぐひよ。さけろふ事なり地
のくそくーる事ふ以の事なり

六獸背支主

六獸背支主 かり欠目よき男子成んてハ
くらも及理を打ちおれて何ぞぞしとを
けん事成れもあひる成やよさるらういよ
きろのいも控をさしむきしてハ病やを
たりさくかり備まるとあさくぬりきさ

夫のあれ成宝資具そろくと望みあし
くけりりーそんろくバ成らろし一備
まし備べき湖のみ成らりなり

七心多福曲

七心多福曲 女人のくせやろる成くのねや
思りぬ事をもろあ揃よつひ根性かろ海さ
ゆよさあふよハ多法あろよをいも心ハ里
れ卯よ福たるりつ機よのねバよき人を
わくさるよつひまよ人と申たがらゆるも大
かこ素のちわり多

八貪賊忘恩

八貪賊忘恩 父母に徳を忘るるはあもの

下

へがしやうく小げうひもまらる時分
 小ちやうのわらうと嫁の糸継のあつこ
 引しよけくも支な抱入らうけい父母い
 扱安きんりしよてまの糸へ移るはまばら
 アうあうしよて父母の懸ハ打わし持た
 の物を食つてまの糸へ持寄るよは父母か
 くられる時ハうらうびおき時ハうらうび母
 かんやうへへく紐をいさるもやうもわ
 ぐあゆきつめきやあうらるん高初也解
 九欲大焼心 九欲のたあを父母をもらり中

せ切らうき事をもねをきりていまも娘
 婿のわらうと母とて父母の物をよへたも
 わらうの残よ入れハ節目よおむの男と
 せりあうせく欠落するも何と嫁して
 後けつらざりまは早世されハ口殺もた
 ねう又婿の者事げのりたれい事を男
 女の子とも余程おせりやうとそれを持れ
 きやぬも他へ嫁し交事たて成たれい或ハ
 ト人いざうふちやうとせしめはうらうと
 色欲をみしををえおけりなり

十二不淨 常流

月水お瘴のけぐるりきこる

れをををり物るー女根の中はねお方乃
くちくち 産はわりの異業のるハ虫と血やと難
かき 下り尖様よりいりり物りー器仲わ
こころ いこ憲くもてを給ふとけり

此十悪は因く邪してハ必中ニ悪乃り入る邪
切の害ヲ多し苦を多く解脱より時をりー
まじ 少へつ経は女人過患尽切無説尽 経は十方
こころ 國土有女人処則有地獄 経は四百四種病宿食
為根本三途八難苦女人為根本云

はくくゆ海根の中はねお方乃は女人の過を
とくせたまふりおかぎとともる事なりされハ
女人と后のゆ産のりりハ畢結ゆし子孫
よゆゆ結どもと胎色のかんてくうられハを合られ
えい 男ももわらりふおつとる事なり三世の物
がら 佛少とん授くせ十方の降去あも入らきに
あや けゆ事教多し至やいへば小國の日本よりくさる
まん 金峯比叡山書寫山礎砌富士湯殿等乃
りん 聖地ハ女人總く入事成免られハ三途ハ難
しあ ともあはれハねべまおあすくさるハけふふあはれ

は愛べき程にもなりて人を留く人々の生れ成
に御了佛教の縁を甲斐もたずかゝる
眼のまは女人なり給るる西方の教主の御
佛如来は然ふ便ありのされ一切の女人等
これぞよ見極む何色の世よりうく心際わ
ゆる心ありて十方の衆生を救ひたまへる身十八
の男女ももまゝもれどもは中なる女の形を
さへゆひしごとし御教の念さうんたりよつさ
てもつとくは佛如来成たのじべし姫姫の心や
かゝるよはけくを倍西方海も成程ふべし心ま

たまげと留くと念とけりハ留へらせ給
名号成るるへハ如来に御教の縁は縁とてし
の縁とあらはれ給るるは縁のよみぢ極楽へま
ひては縁れわやふみう者べたかみく信んお
念佛成るる事なり給べし

靈魂得脱物語卷下終

下

寬政四年壬子春發行

浪華書林

心每橋筋北久太良町
河内屋喜之清

三條通麩屋町角

皇都 藤井文政堂

書肆 山城屋佐兵衛

